中国での実態調査を終えて

～地域における多文化共生、経済・観光交流を考える～

全国市町村国際文化研修所教務部
副主幹　林　　敬治
主　査　内田 憲児
多文化共生コーディネーター　時　　光

はじめに

我々は、2011年11月21日（月）から24日（木）の４日間の日程で、多文化共生（研修生・技能実習生に関すること）や売り込み（中国での市場開拓に関すること）・インバウンド（中国からの観光客誘致に関すること）について調査を行うべく、中国を訪問した。

いずれについても、既に取り組みもしくは検討を行っている自治体もあると思われるが、まだ十分に知られているとは言い難い。今後、より広い範囲に興味を持っていただき、施策にも反映していただくため、今回の訪問で実際に見て、聞いて、感じたことについて報告したい。

[日程]

11/21（月）	北京	出国、北京首都国際空港到着
		自治体国際化協会（CLAIR）北京事務所訪問
		日本政府観光局（JNTO）北京事務所訪問
11/22（火）		日本貿易振興機構（JETRO）北京事務所訪問
		中国人民対外友好協会・中国対外友好合作服務中心訪問
11/23（水）	大連	大連創業園訪問
		中国対外友好合作服務中心大連事業部訪問
11/24（木）		大連周水子国際空港出発、帰国

中国の現状

今回の訪問では、首都である北京と、北京から東に約500km離れた遼寧省大連にて調査を行った。

両都市とも建設中のビルが多く、活気と雑然さの入り混じる、いわゆる発展途上の雰囲気を持っていた。しかし、北京は想像以上の大都会であり、大連も訪問するまでは研修生や技能実習生を送り出している片田舎を想像していたが、実際にはかなりのにぎわいを持つ大都市であった。

道路を走っている車は、タクシーなど20年以上使用していると思われる古い車両も多かったが（乗車したタクシーは走行距離が50万kmを越えていた）、その一方で大衆車はもちろん、日本やヨーロッパの最新高級車も数多く見かけることができた。

北京では、地下鉄も整備され多くの人が利用している。17時過ぎに乗る機会があったが、約１分おきに電車が到着するものの、日本では体験したことがないほどの大混雑で、まさに「押し合いへし合い」という表現が当てはまる状況であった。

地下鉄に乗車する際はICカードを利用して自動改札を通過するが、自動券売機は故障しているものも多く、結局券売機の隣に立っている職員から直接購入することもあった。また、テロ防止のためか、入場時は荷物のチェックを受けなければならないところにお国柄を感じた。

街中には多くの店舗が立ち並んでいた。新しくきれいなブランド店もあれば、古い昔からの商店もあった。また歩道では多数の露店も見かけることができたほか、北京の大通りではなぜかアニメ『一休さん』のオープニン

巨大デパートや飲食店が立ち並ぶ“北京の銀座”王府井（ワンフーチン）

いまや中国屈指の貿易・工業・観光都市となった大連へ向かう

グ曲が流れていた。百貨店には物があふれかえっており、その中には日本語表記の商品も見ることができた。

日本から進出している吉野屋やユニクロ、餃子の王将などを見かけることができたほか、中国でも大人気で多く出店しているマクドナルドではチキンバーガーを食べる機会があったが、中国仕様なのか少しピリ辛の味であった。

また、日本の100円ショップと似たものもあった。商品を見ていると日本で売っているものと同じものもあり、もともと輸出用のものをそのままこちらで売っているようだった。しかし10元ショップなので、実は日本より価格が高いのである（１元＝12円程度）。

東日本大震災の影響

東日本大震災発生後、多くの中国人技能実習生が帰国し、日本国内では労働力不足となった地域が出現した。また、震災後に外国人観光客が激減し地域経済に大きなダメージを受けたところもあった。

そのようなことから、今回の訪中を利用して、中国国内では震災についてどのように報道されているのか、中国の人たちは日本の震災をどのように感じているのか。また、今後日本にはもう来ないのか、日本の商品は危ないと思われているのか等を調べることにしていた。

様々な人からお話を伺うことができたので、ご紹介したい。

結論からいうと現在は心配ない程度までイメージ回復がされているということで、旅行業の分野では震災による影響はほぼなくなったと伺った。日本の食品に関しては一部に心配する向きもあり、輸入禁止が解かれていない商品もあるが、一般の人は、実はそれほど神経質にはなっていないようである。

マスコミ報道については、当初は日本からの情報提供がないため、日本全土が放射能汚染された（広大な中国の面積から見ると東北も九州も同じらしい）というものや、日本に行ったら子どもが産めなくなるとか、実は日本は新型核兵器を作っているのではないかと

いう笑えないものまであったようだ。しかし関係機関の努力のおかげで、９月ごろからは落ち着きを見せ、正確な報道がなされるようになった。しかし、最近はほとんど日本のことが報道されなくなっており、日本への関心が落ちているのではないか、いずれなくなってしまうのではないか、実はそちらのほうが心配だと調査の過程でそのようなお話を聞くことができた。

多文化共生に向けての課題

2010年末現在における日本の外国人登録者数は213万人を超えており、外国人を一時的な滞在者ではなく、地域で生活する一員として捉えていく、すなわち多文化共生を進めていくことが求められている。

中国籍は外国人登録者の３分の１弱に当たる68万人にのぼり、15年前（1995年／22万人）と比較すると３倍以上に急増している。2007年以降は韓国・朝鮮籍を抜いて最も多くなっているが、この間に新たに日本へ入国した者の中には留学生や研修生・技能実習生が多く含まれる。

日本における多文化共生というと、ブラジルやペルーといった南米出身の日系人がクローズアップされがちであるが、実は数でいうと中国籍の人たちがいちばん多いのである。

その中で今回調査を行った技能実習生は、雇用する企業で日常生活の面倒を見ていることや、期限が来たら帰国することなどから、地域にとってその存在が認識されていないのが現状である。

しかし、彼らのように技能実習生として来日する者は今後も続いていくと思われる。彼らを見えない存在から地域で生活する若い力として、多文化共生施策に巻き込んでいくような取り組みが求められる。そのためには彼らを雇用する企業やその従業員らとの連携が不可欠であることを今回の訪問の中で、再確認できたのは一つの大きな収穫であった（元技能実習生への調査・インタビューについての詳細は時光が前号でレポートしているので、興味のある方はそちらをご参照願いたい）。

中国の市場開拓と観光客誘致

当研修所では平成22年度から「海外へ売り込め！地域資源を活用した海外市場開拓セミナー」を実施しているが、この研修の充実を図ることが今回の調査の一つの目的であった。

今回は、中国で地方自治体の海外活動のサポートを行っている３機関（CLAIR：自治体国際化協会、JNTO：日本政府観光局、JETRO：日本貿易振興機構）を訪問した。

それぞれの団体から、最近の経済動向や中国の生活状況についてお話を伺ったほか、中国市場開拓や中国人観光客誘致についての取り組み、その他多岐にわたる有益な情報をご提供いただいた。この場を借りてお礼申し上げたい。

中国政府が内需拡大政策をとっていること、所得格差は広がっているが、貧困層の数が減っている状況にあること、などから中国は市場として依然有望であるが、安易な気持ちで進出しようとしてもなかなかうまくいかないようである。

当たり前ではあるが、単に現地見本市に出展する、中国のデパートに物を置いてもらう、観光パンフレットを置いてくるということだけで、物を買ってもらえる、人が来てくれるというものではない。事務所を構え、あるいは進出企業と相談し、肌感覚で現地のニーズをつかみ、戦略を練って、バイヤーなどの現地協力機関を開拓していくのが成功への最低条件である。

外国人観光客受け入れについては、お話を伺う中で日本の受け入れ側にも課題があり、自治体などでできることがまだまだあるのではないかと感じた。

お客様を楽しませる通訳ガイド、交通機関、ホテル、パンフレット、館内の外国語表示などを整備することは外国人観光客誘致には当然有効である。

JNTO北京事務所は高層ビルの28階から中国全土へ情報を発信している

ただ、それだけを整備すればいいというわけではない。中国社会もいわゆる口コミ社会であって、Twitterの中国版の影響は無視できないくらい大きいそうである。楽しかった、もう一度行きたいと思ってもらうことが重要であり、そのためには地域で外国人観光客を受け入れる土壌をつくらないといけない。

地域が一体となって外国人観光客を歓迎するという雰囲気を生み出していくためには、行政や観光協会など様々な機関や企業が連携し、地域住民も巻き込みながら、外国人観光客を受け入れるという共通の目標を持つ必要がある。その中では、双方の国のマインドを持った人の活躍が特に期待され、前項でも記載したような多文化共生施策と連動させることで相乗効果が期待できるのではなかろうか。

おわりに

多文化共生調査のため、ブラジル、中国へ出張する機会を得て、現在勢いのある２か国の現状を目にする機会を与えていただいた。

この調査を通じて、絆の大切さを考えさせられた。中国では技能実習生制度開始当初からかかわっておられる人々や元技能実習生と日本とのかかわり、ブラジルでは技術研修生・留学生制度にかかわった人々や日系団体と日本とのつながりを知ることができた。

長年にわたってこうした顔の見える関係が築けていることは喜ばしいことだが、それが日本であまりに知られていないことを懸念している。

中国の技能実習生事業について、いろいろと意見があることは承知のうえでいうと、制度をうまく利用して幸せになっている人々、20年以上もそのお手伝いをしている人々の存在、それを通した日中のつながりは確実に存在している。

ブラジル日系人社会（特に１世）でいうと、まだ日本に対し熱い思いや期待を持ってくれている人は多い。しかし、この思いが一方通行のままでは、いつかこちらが振られてしまうのではと心配している。

先日、ブラジル出張でお世話になった県人会の方と日本で再会し、市場開拓や外国人観光客の話をしたところ、「なぜもっと我々を使わない。いろんなことに対してどんどん利用してくれたらいいのだ」と熱い思いを打ち明けてくれた。

今後、外国人観光客誘致及び地域資源の海外への販路拡大を行っていくのであれば、こうした絆を持っていることは地域にとって大きな強みになると考える。

そうした絆について、皆様が少しでも興味を持っていただくことができれば幸いである。